中国における庭石と盆石の鑑賞法の形成とその定着について

A Historical Study on the Formation and Fixing of Ways of Appreciation at Garden Rocks and Tray Rocks in China

李 樹華*
Shuhua LI

摘要：歴史、文化および地理的環境などの影響を受けて、中国庭園と盆景の主な構成材料である石に対して、独特な鑑賞法が形成された。本文は、唐、宋時代及び唐時代以前の庭石と盆石に関する文献を分析して、その鑑賞法の成立と定着を検討したものである。結論は次のとおりである。秦、漢時代には、庭石が応用され始めた。唐時代には、太湖石の鑑賞法が形成された。宋時代には、庭石と盆石は、近山形石、遠山形石、形象石及び紋様石の四種類に分けられ、その鑑賞法がそれぞれ異なる。近山形石の鑑賞法は、宋時代の米芾の石の相石法と一致している。遠山形石の鑑賞法は、遠山の姿を表現する峰、尾根、崖、谷及び麓などを重視する。

1. はじめに

庭石は庭園における捨石あるいは石組を構成する石を意味し、また、中国においては独立した怪石、あるいは假山を構成する石を意味する。盆石は盆山ともいわれ、水盆の上に石を配置するものである。庭石と盆石とでは大きさが異なるが、両者とも限られた空間に大自然にある岩と山野の景観を表現したもので、その鑑賞法は同じであろう。庭石と盆石の鑑賞法の成立とその定着について研究することは、中国におけるある歴史段階の石の文化を考察し、また、今日の選石と石の鑑賞について考察する上でも有益だと考える。

中国における石の鑑賞法に関する先行研究については、中国の文献は、未だ見出していないが、日本においては、田治六郎¹⁾と外村中²⁾が太湖石の鑑賞について、また、丸島秀夫³⁾が中国における盆石の鑑賞法を若干言及したにとどまっており、しかもこれらの研究についてはその観賞法の成立過程とその定着に関して再考し、補う必要があると考える。

従って、本文は唐、宋時代とその以前の石に関する文献を分析し、庭石と盆石の鑑賞法の成立とその定着に関して検討してみたい。

2. 庭石と盆石の鑑賞法の形成

中国古庭園はその形成と発展に従って、まず假山と庭石が用いられ始め、それと共にさらに盆石が出現した。庭石と盆石の応用によって、選石法と石の鑑賞法も形成された。従って、庭石と盆石の鑑賞法の成立について研究するため、まず、古典庭園における假山と庭石の利用を分析する。

(1) 唐時代以前における庭石の応用

『詩経』は東洋最古の詩集であり⁴⁾、その中の「靈台」という一文は周文王（周太王の孫、約B.C.11世紀の人）の靈台、靈園及び靈沼を謳歌した⁵⁾。これらは、中国の上古園林の原形である。この原形は、高く聳える靈台を最も主要な景観とし、次いで水体（靈沼）が重要な地位に位置するというもので、これは商（約B.C.17～約B.C.11世紀）周（約B.C.11世紀～B.C.771）時代の人々が神山（崑崙山）と西北部の地理的特徴に対しての認識を表現したものである⁶⁾。

秦（B.C.221～B.C.206年）、漢（B.C.206～A.D.220年）時代に、中国は統一された。そして、古典園林の内容と形式は当時の文化と宇宙観の重大な変化の影響を受けるにつれて変化した。

『史記・封禪書』には「蓬萊、方丈および瀛洲三神山は、渤海の中にあるそうである。これらの神山は遠くない、……。仙人たちがおり、不死の仙薬もある。」⁷⁾と記述している。秦の始皇帝は、長生不死を求めため、大臣を派遣して渤海の中に神山と神薬を探し求める一方、宮廷苑囿に三神山を建造した。「始皇帝は長安を都とし、渭水を流し、池を作った。池の中に蓬萊と瀛洲の島を建てた。」⁸⁾また、漢武帝は「建章宮未央殿の北側に大きい池を作った。……。池の中に蓬萊、方丈、瀛洲および壺梁などの仙山がある。」⁹⁾要するに、秦、漢時代から、“一湖三山”の内容と構成は、中国園林の伝統的な手法になってきた。

三神手を築造した結果として、假山と庭石が園林の中に現れた。『三輔黄図』には漢孝文帝の次男劉武が兔園を建築し、その中に百霊山があり、山の上に膚寸石があると記述されている¹⁰⁾。また『西京雜記』には、茂陵（現在の陝西省にある）の富民の袁広漢が庭園を営造した時、石を積んで山となすと記している¹¹⁾。注目すべきは、当時石を積んだ時に、山の石を全部使えるはずはなく、石を選択して使ったと考えられていることである。『三国志・魏書』の「高堂隆伝」一節には、魏明帝（204～239）は芳林園を建造した時、庭石の紋様と色を選択して使ったと記されている¹²⁾。

(2) 唐時代における太湖石の鑑賞法の形成

文人の隠逸文化の形成と発展につれて、唐時代以後、「壺中天地」¹³⁾は士人階層が極力求める境地になってきた。園林と盆山は「壺中天地」の具体的な作品で、限られた空間に豊かな芸術変化と深奥な芸術空間を作り出したものである。一つの庭石からは、大山の景観を見るが、一点の盆山から、大自然の景色が表現される。従って、庭石と盆石は、盛んに用いられていた。庭石と盆石は種類が多いが、最も有名なのは太湖石である。中国における石の鑑賞法は、最初に太湖石から成立したと推測される。

太湖石は江蘇省の南部、浙江省との境にある太湖から産出した石灰岩である。太湖石の価値あることを世に知らせたのは白居易（772～846）である。彼の「双石」と題する詩に「蒼然たる両片の石、その形が怪にし且つ醜。俗用に堪える所なく、時の人嫌いて取らず」¹⁴⁾とあるのは太湖石のことだとされていた。ここに、唐時代における詩文の中に見つけた太湖石を謳歌するものから、太湖石の鑑賞法を表1のように分析した。

表1に示すように、太湖石の鑑賞法の各観賞要素は、次のとおりである。形、穴、苔、聲、光沢、色及び野面など。

*京都大学大学院農学研究科

表－1 唐時代の詩文から見られた太湖石の鑑賞法

編号	作者	詩文名称	形	穴	聲	苔	光沢	色	野面
1	姚合	買太湖石 ¹⁵⁾	高く突立って 険しい様	彫刻のような 中空になる				青い	
2	呉融	太湖石歌 ¹⁶⁾	朝廷の官人と 武士を似てる	穴を通じて 風が来る					
3	牛僧孺	李蘇州遺太湖石奇状 絶倫因題二十韻奉呈 夢得 ¹⁷⁾	龍、虎及び鬼 怪の形をして いる	穴があって、 石の中に明る くなった	軽く叩くと 玉を叩く音 が出てくる				表面にうろ このように している
4	白居易	双石 ¹⁸⁾	高く聳えてい る。不思議な 形がしている	穴が深い		穴の周りに 苔が付けて いる			
5	白居易	太湖石 ¹⁹⁾	高く突立って 険しい様	華陽洞のよう な中空になる					
6	白居易	太湖石 ²⁰⁾	高く突立って 険しい様	穴がある		苔が洞の周 りにある			
7	白居易	奉和思黯相公以李蘇 州所寄太湖石奇状絶 倫因題二十韻見示兼 呈夢得 ²¹⁾	高く突立って 険しい様	穴があって、 剣門の景色を 見える	玉を叩くよ うな音が出 る	苔が石の表 面にまだら になる	潤う	黒い	
8	劉禹錫	和牛相公題姑蘇所寄 太湖石兼寄李蘇州 ²²⁾		中空になる	玉を叩くよ うな音が出 る	苔が緑にな った	潤う		
9	皮日休	太湖石 ²³⁾	動物、人物な どを似ている	中空になる		苔が石に付 ている			
10	王貞白	太湖石 ²⁴⁾	高く突立って 険しい様						
11	王貞白	依韻和幹公題太湖 石 ²⁵⁾	高く聳えてい る	穴が深い		まだらにな っている苔 が緑になる			
12	陸龜蒙	太湖石 ²⁶⁾	石が木の枝の ようになった	洞穴がある					
13	白居易	太湖石記 ²⁷⁾	形が多種多様						
計		13	12	11	3	6	2	2	1

形は太湖石の鑑賞に対して最も重要なポイントであるとわかる。太湖石の形は多種多様、千姿百態である。近山の峰を表現する場合は、「その山が高く聳えている（山形老嵯峨²⁸⁾）」人物と似ている場合は、「朝廷の官人が立っていると武士が密かに伺い撃っている様（朝家正人立，戰士方狙擊²⁹⁾）」動物と似ている場合は、「龍と鳳鳥の様（如虬如鳳³⁰⁾）」雲状と似ている場合は、「流動している雲の高大の様（如喝雲歆雷，巍巍然³¹⁾）」などである。これらのことから太湖石の珍重はその不思議な形のためであると考えられる。

次は太湖石が数多くの穴によって中空になった点である。穴は長い年月の間に湖水の波に洗われてできた窪みや洞など（唐時代には“彈子窩”と謂われた）であり、仙人が住む所と思われた。即ち、太湖石は不思議と靈感をもつものになり、神石と神山が形成されていた。例えば、「珍しくて鬼怪がおり、神秘で雲と雷が集まる（奇応潜鬼怪，靈合蓄雲雷³²⁾）」このような石を庭園の中と机上に飾ると、日々神山と向い合えるのである。形と穴は太湖石を選石し鑑賞する際、最も重要な二つの特徴である。

苔は石の表面に付着生長する蘚苔類で、太湖石に生命感と蒼老感を生み与える。聲は石の構成が緻密で、叩くと響く音である。例えば、「そのよく通る音は美しい玉を叩いて出た音のようである（清越扣玉塊³³⁾）」苔、音、色、光沢および野面も太湖石の鑑

賞法のポイントである。白居易は「石には多くの種類がある。その中でも太湖石が一番で、羅浮石と天竺石がその次である」³⁴⁾と述べ、唐時代の中期から人気が一番になってきたことがわかる。

唐時代に成立した太湖石の鑑賞法は、宋時代における庭石と盆石の鑑賞法の定着に基礎を与えた。

3. 宋時代における庭石と盆石の鑑賞法の定着

宋時代（960～1279）の文化、芸術の大発展につれて、“壺中天地”という境地としての庭園と盆景の観賞は盛んに流行しており、その内容と手法は唐時代より、さらに進歩した。特に文人達の間で石を愛でる風潮が顕著になり、当時、庭石と盆石に関する専門書で、杜綰の『雲林石譜』、漁陽公の『漁陽石譜』³⁵⁾、常燃の『宣和石譜』および范成大の『太湖石記』などが著わされている。

文献によって、宋時代から庭石と盆石は、遠山形石（図1）、近山形石（図2）、紋様石（図3）および形象石（図4）に分けられることがわかる。石の種類により、その表現景物と観賞点が表2のように異なる。

表2にある形象石と紋様石の鑑賞点は形と表面の紋様図画である。続いて近山形石と遠山形石との鑑賞法に関して分析したい。

（1）近山形石の鑑賞法の定着

図－1 遠山形石「常山石」
（明・林有麟『素園石譜』より）

図－2 近山形石「玄石」
（明・林有麟『素園石譜』より）

図－3 紋様石「鴉鳴樹石屏」
（明・林有麟『素園石譜』より）

近山形石は近山の山峰の景観を表現し、鑑賞点が形、穴、透（中空）、色、聲、光沢、質および野面などの要素と関連する。その中の質、光沢、色および聲は石の化学構成で決まって、石の肌と関連するが、形、穴および透（中空）などは、石の形態と関連する。宋時代における詩文の中に見つけた近山形石類に関するものからその鑑賞法を表3のように各石の主な観賞要素に関して分析する。

近山形石の形は、向こうから透けて見える形（玲瓏形）、高く聳えている形（嶮怪形）および孤峰、双峰形などがある。これらの形態は大体高く細くて、宋時代の米芾の相石法の“秀”“瘦”と同じである。

色は石の色彩の美しさである。赤、黄及び緑などの石は上品で、よく見える灰色、くすんだ色の石は並のものである。

質は石の持つ性質について広く用いられる用語で、次のようなことがいえる、密粗、硬軟及び堅脆など。特に庭石と盆石としては緻密な石質の方が肌が滑らかで適している。水で流されて磨かれた際、硬い方が光沢が出て佳良である。強靱なものは侵食、風化作用に耐えて形を残すが、脆弱なものは砕けて小片になりやすいため観賞石には適さない。石の色、光沢及び聲は石質により異なり、石質が緻密であれば、光沢は潤い、色も美しく、叩くと聲もよく通る。要するに、石の色、光沢及び聲などは質と一致しており、米芾の相石法の“雅”である。

石の穴、また穴が多くて中空になったのは、上記の太湖石のところで検討したように、石の神秘性と靈感を増やす。これは石の“透”である。石面が天然にさらされ永い間放置されてあると石面に表われる造成鉱物の中で軟質のものは磨滅したり、離脱したり、欠損したりで表面がざらざらになる。これは日本で“野面”と呼ばれて、米氏の相石法の“皴”にあたる。

上に検討してきたように、近山形石の鑑賞法は米芾の相石法の“秀”、“瘦”、“雅”、“皴”及び“透”と大体一致している。しかしながら、米芾の相石法は近山形石に適しているが、遠山形石に適さない。このことから、次に遠山形石の鑑賞法を検討したい。

（2）遠山形石の鑑賞法の定着

遠山形石は、連山の姿を表現し、視点が遠く、視野がひらけている。その石の主な構成は近山形石と異なり、山峰、尾根、崖、谷及び麓などがある。または、山峰の数は多ければ多いほど、石の高さ／幅の値が小さくなる。宋時代における詩文の中に見つけ

表－2 宋時代における庭石と盆石の分類

	遠山形石	近山形石	形象石	紋様石
表現 景物	連山の姿、風景を表現する	近山の山峰景観を表現する	自然に鳥や人や動物や雲などを表現する	石の表面に花卉や動物や図画を表現する
形状	幅が高さより大きい	幅が高さより小さい	多種多様	多種多様

図－4 形象石「醉道士石」（明・林有麟『素園石譜』より）

た遠山形石に関するものからその鑑賞法を表4のように各石の主な観賞要素に関して分析する。

表4の結果によって、遠山形石に対して最も重要な観賞因子は石の峰巒で、遠山の一番の特徴である。また崖、谷及び麓は遠山の重要な特徴である。色、聲、光沢及び質は観賞の重要なポイントで、近山形石と同じである。また、当時に遠山形石の連石と観賞する際、三山（蓬萊、方丈及び瀛洲）五嶽（東嶽は泰山、西嶽は華山、南嶽は衡山、北嶽は恒山、中嶽は嵩山である）及び他の名山を表現したり、思い出させたりした。例えば、蘇東坡の仇池石は太白山（現在の陝西省にある）と峨嵋山（現在の四川省にある）の景観を表現した⁶⁰⁾。范成大の峨嵋石は峨嵋山の景観を表現した⁶¹⁾。また山峰の数を増加させたり、山の高く聳える程度を増やしたりするために、当時の人々は特製の粘性材料で、小さい石を主山の適当な所に接続したり、積んだりした⁶²⁾。この技術は約千年の間に渡って、現在でも中国の假山と盆景を造成する時、使われている。

宋時代における石の鑑賞法が定着してから、以後の元、明及び清各時代の庭石と盆景の選石と鑑賞に大きな影響を与え⁶³⁾、さらに日本の五山禅林の盆石の鑑賞にも影響を与えた⁶⁴⁾。

4. おわりに

上記の庭石と盆石の鑑賞法に関して検討してきた結論は次のとおりである。

(i) 秦、漢時代には宮廷苑囿の発展につれて、庭石が採用されてきた。

(ii) 唐時代には、士人の隠逸文化の発展と、“壺中天地”という境地の形成につれて、太湖石は庭園の中に応用され、太湖石に対しての鑑賞法も形成された。

(iii) 宋時代には、盛んに流行していた庭石と盆石は近山形石、遠山形石、形象石と紋様石に分られ、その鑑賞法がそれぞれ異なる。紋様石は石の表面にある紋様を重視する。形象石は石の形象を重視する。近山形石の鑑賞法は唐時代に形成された太湖石の鑑賞法と大体同じで、高く聳える石の形態と石の中空を重視する。

表－3 宋時代における近山形石の鑑賞法

番号	石の種類	形態	穴	中空	色	聲	光沢	質	野面	紋様
1	青州石 ³⁷⁾	精巧な形	穴が多い	透き通っている	紫		やや乾っている			
2	平江府太湖石 ³⁸⁾	高く聳えている形	穴がある	中空になる	白いと青黒い	叩くと音が少し出る	潤う	堅い	野面がある	
3	臨安石 ³⁹⁾	高く聳えている形	洞穴が曲げている	中空になる	濃青い、青白	叩くと音がでてくる	潤沢がある	堅い		
4	湖州武康石 ⁴⁰⁾	高く聳えている形	洞穴がある	透空になる	青、黄黒				筋が多い	
5	豊州石 ⁴¹⁾	高く突立って険しい様			青白		やや潤う			白い紋様がある
6	平泉石 ⁴²⁾	高いと低い峰がある			青い	叩くと音がでてくる	光潤がある	堅い		
7	硯山石 ⁴³⁾	多種多様	穴が多い	中空になる	黄色	叩くと音がでてくる	清潤である	堅い		
8	廬溪石 ⁴⁴⁾	高く聳えている形	洞穴がある	中空になる	青黒					
9	太湖石 ⁴⁵⁾	峰のようにしている	洞穴がある	中空になる	黒い		光潤がある	堅い		
計		9	7	7	9	4	7	5	2	1

表－4 宋時代における遠山形石の鑑賞法

番号	石の種類	峰、巒	崖	谷	麓	洞穴	色	聲	光沢	質	野面
1	壺壁石 ⁴⁷⁾	峰巒の形がしている	聳える崖がある		麓がある	穴があって中空になる	黒い	よく通じる音がある	清潤		おにくるみのよう
2	林慮石 ⁴⁸⁾	高く聳える峰巒の形	崖が多い	谷が多い		中空になる	青い	叩くと音がでてくる	潤う	堅い	
3	無為軍石 ⁴⁹⁾	数十の峰がある	聳える崖がある	谷がある		洞穴がある	やや黒い	叩くと音がでてくる	潤う		
4	常山石 ⁵⁰⁾	一つの石が十数の峰がある						叩くと音がでてくる	光潤がある		
5	英石 ⁵¹⁾	峰巒がある				透き通っている	浅青い 浅緑	音が少し出てくる	やや潤う		
6	湖口石 ⁵²⁾	峰巒の形がしている	崖がある	谷がある		透き通っている	青い	叩くと音がでてくる	やや潤う		筋状のような野面
7	袁石 ⁵³⁾	高く聳える峰巒が多い	崖がある			穴がある	やや青い				
8	永康石 ⁵⁴⁾	十数の峰がある					白い	よく通じる音がある	光潤がある	堅い	
9	永州石 ⁵⁵⁾	八、九の峰がある				穴があって中空になる	緑		潤う		
10	嶼山石 ⁵⁶⁾	峰巒がある				穴がある	緑		清潤	堅くて もろい	
11	仇池石 ⁵⁷⁾	峰巒がある	崖がある			穴があって精巧である		叩くと音がでてくる	清潤		
12	李後主硯山 ⁵⁸⁾	前から後まで36の峰がある			左右麓がある						
13	怪石 ⁵⁹⁾	小さくて峰巒が多い	崖がある			山洞がある					
計		13	7	3	2	10	9	8	10	3	2

遠山形石の鑑賞法は石の峰、崖、谷及び麓などを重視する。近山形石と遠山形石との鑑賞法の異同は表5のようにまとめている。

表－5 近山形石と遠山形石の鑑賞法の比較

見方	高、幅	形態	穴、中空	崖	谷	麓	色	聲	光沢	質	野面
近山形石	高さ>幅	高く聳える	中空になる	重視	重視しない	重視しない	重視	重視	重視	重視	重視
遠山形石	高さ<幅	連山	重視しない	重視	重視	重視	重視	重視	重視	重視	重視しない

補注・文献

- 田治六郎 (1948) : 太湖石 : 造園雑誌 11(1), 16-24
- 外村中 (1995) : 明末清初以前の中國庭園における太湖石について : ランドスケープ研究 59(1), 24-26
- 丸島秀夫 (1992) : 日本愛石史 : 487-488, 石乃美社
- 諸橋轍次 (1967) : 大漢和辞典 : 巻 6, 813, 東京大修館書店
- 詩経 大雅・靈台
- 王毅 (1990) : 園林与中國文化 : 273-274, 上海人民出版社
- 漢, 司馬遷 : 史記・封禪記
- 同上書
- 漢書・郊祀志・下。
- 漢, 劉歆撰, 葛洪(晋)集 : 西京雜記 : 巻 3
- 六朝 : 三輔黃圖 : 巻四(苑囿)
- 三国志 : 魏書・高堂隆伝
- 壺中天地, 仙人の住む境地。
- 唐, 白居易 : 全唐詩 : 双石詩, 巻 4 4 4
- 唐, 姚合 : 全唐詩 : 巻 4 9 9
- 唐, 吳融 : 全唐詩 : 巻 6 8 7
- 唐, 牛僧孺 : 全唐詩 : 巻 4 6 6
- 同前掲 14)
- 唐, 白居易 : 全唐詩 : 巻 4 4 5
- 同上書 : 巻 4 4 8
- 同上書 : 巻 4 5 7
- 唐, 劉禹錫 : 全唐詩 : 巻 3 6 3
- 唐, 皮日休 : 全唐詩 : 巻 6 1 0
- 唐, 王貞白 : 全唐詩 : 巻 8 8 5 の補遺 四
- 同上書
- 唐, 陸龜蒙 : 全唐詩 : 巻 6 1 8
- 唐, 白居易 : 太湖石記
- 同前掲 19)
- 同前掲 27)
- 同前掲 21)
- 同上書 32) 同前掲 21)
- 同前掲 17)
- 同前掲 27)
- 宋時代の『漁陽公石譜』と『漁陽石譜』の両書は内容が全く同じで, 同一書物であると推測している。
- ～44) 宋, 杜綰 : 雲林石譜
- 宋, 范成大 : 太湖石志
- 参見 35)
- ～57) 同前掲 36)
- 宋, 趙希鵠 : 洞天清緑集・怪石
- 宋, 蘇軾 : 壺中九華石詩
- 同前掲 35)
- 宋, 范成大 : 峨嵋石詩
- 同前掲 36) 「石之諸峰間, 有外来奇巧者相粘綴, 以増嶮怪。」
- 清, 李漁 : 一家居室器玩部
- 同前掲 3), 38

Summary : This paper studied the formation and fixing of ways of appreciation at garden rocks and tray rocks in the Tang(唐), Song(宋) and Pre-Tang Periods in China.

The results areas follows:

- Garden rocks were first used in the Qin(秦) and Han(漢) Periods.
- Taihu rock was used in gardens, then the ways of appreciation were formed in the Tang(唐) Period.
- All the rocks of gardens and trays were classied into rocks expressing close mountains, rocks expressing distant mountains, shaping rocks and pattern rocks in the Song(宋) Period. The ways of appreciation to these rocks were different : The rocks expressing close mountains were often made of high and rising shapes with holes in the rocks. The rocks expressing distant mountains were chosen to represent peaks, ridges, valleys and the feet of mountains. The shaping rocks were shaped to resemble animals, man and cloud shapes etc. The pattern rocks were chosen for the patterns on the surface of the rocks.